

歩行不能な脳原性障害児者に対する下肢観血的治療

なか 中 であら 寺 たか 尚 し 志 き 木 はら 原 きよし 清

キーワード：重度脳原性障害児者，下肢機能障害，下肢関節変形，
整形外科的選択的痙性コントロール術

要 旨

2000年以降，私たちは歩行不能な脳原性障害児者の下肢機能障害，二次性関節拘縮や脱臼に対しても整形外科的選択的痙性コントロール術（Orthopaedic Selective Spastic Control Surgery）を中心とした観血的治療を施行してきた。今回，その術後成績とその後の経過についてまとめた。対象は脳原性障害児者18例（男性11例，女性7例），手術時年齢は平均18歳11ヵ月，粗大運動レベルは全例歩行不能で車椅子や寝たきり全介助であった。経過観察期間は平均4年7ヵ月であった。手術内容はOSSCSを全例に施行し，大腿骨減捻内反骨切り術，観血的股関節整復術等が症状に応じて施行された。結果は下肢機能評価では約半数の改善であったがその後の機能は保たれ，脱臼整復等の治療目的の達成，患者及び介護者の満足度は80%前後改善し維持されていた。OSSCSを中心とした下肢観血的治療は歩行不能な脳原性障害児者に対しても有用な治療手段と思われた。

はじめに

重度の脳原性障害児者は強い痙性麻痺のため乳幼児期より脱臼，側弯が発生し，リハビリテーションのみでは二次的関節変形，胸郭変形の予防，さらにそれが一因となる呼吸機能障害など，種々の生命維持器官に対する障害の進行予防には限界があり，彼らは日常生活さえも苦しめられて

いる¹⁾。私たちはこれらの症例の内，保存的治療に抵抗する症例の痙性，下肢機能障害，関節脱臼，変形に対しても整形外科的選択的痙性コントロール術（Orthopaedic Selective Spastic Control Surgery，以下 OSSCS）を中心とした観血的治療を施行してきた。今回，術後成績とその後の経過を調査したので若干の考察を加えて報告する。

対 象

2000年3月から現在まで歩行不能な脳原性障害

Takashi NAKADERA et al.

西部島根医療福祉センター整形外科

連絡先：〒695-0001 江津市渡津町1926